

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成28年9月20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 飯 田 悠 哉

助 成 の 種 類	<b>平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成</b>		
研 究 集 会 名	第14回世界農村社会学会議 XIV WORLD CONGRESS OF RURAL SOCIOLOGY 2016		
発 表 題 目	日本農村におけるフィリピン人季節労働者の斡旋システムと就労実態 Selling Bodyweight; The Brokerage System of Filipino Migrant Farm Workers in Japanese Agriculture.		
開 催 場 所	カナダ、オンタリオ州立 ライアソン大学		
渡 航 期 間	平成28年8月8日 ～ 平成28年8月15日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000 円	
	使用した助成金額	300,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	学会参加費	14,000 円
		渡航費	215,000 円
現地滞在費		82,000 円	
※以上総経費の一部に使用			
当財団の助成について	<p>(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)          カナダとの往復の旅費だけでも大変に厳しい経済的負担となるどころでしたが、貴財団の助成によりはれて国際研究集会での報告を果たすことができ、とても嬉しく思っております。ご支援いただきましたことこころより感謝いたします。トロント滞在中は各国からの研究者と集中的に議論を交わすことができ、今後研究をすすめるうえでの指針もえられました。国際学術集会への参加は「若手研究者」にとって、研究実績の面だけでなく、研究上の刺激やネットワーク形成などの面においても非常に有意義な機会であると実感いたしました。重ねて感謝申し上げますとともに、今後とも若手研究者向けの助成の継続と拡大を強く希望いたします。</p>		

【助成種類】 国際研究集会発表助成・若手

【参加学術会議の概要】

IRSA Congress は世界農村社会学会が 4 年ごとに主催し、世界中から農村社会学者、開発経済者、農民研究者が集う、同分野で最大規模の国際学術会議である。2016 年の今回は世界 60 カ国から 800 名以上の参加があり、650 の研究報告がなされた。今回で 14 回目を数える IRSA Congress は、各回とも国際的な研究潮流を踏まえた独自の集会テーマを設定し討論の場をひらいてきたが、今回も「持続的かつ適正な地域変容にむけて：その連関と複雑性」というテーマが設定され、現下の農村社会の置かれた世界的情勢のもとで農民および農村社会のありうべき変容、変革の方途を探るという極めて実践的な課題が討論された。申請者は、各国の農業移民労働者の社会的状況についての比較考察を討議するセッションに参加し、日本の事例に関する考察を発表した。

【発表内容】

本会議への参加によって、世界的な農村社会の変容のなかで申請者の研究事例を位置づける視座を獲得できるとともに、ラテンアメリカやヨーロッパで同様のテーマを調査する研究者らとの関係形成を図り、今後の共同研究に繋げうると期待できる。

【学会の様子】 DDW では 6 時半から 17 時半まで 消化器に関連する様々なセッションが 開催 される。ブ レックファーストセッションでは、エキスパートから講義と参加者によるデ ィスカ ュッションが 少人数で 行われていた。「術後膵液瘻・胆汁瘻の管理」のセッションでは、術中の インフォメーションド レーンの留置や術後管理だけでなく、リサーチを行う上で の膵液瘻の 定義に多くの時間が 割かれていたのが 印象的であった。モーニング セッションの後は、炎症性 腸疾患や肝炎といった消化器内科関連を中心に講義、パ ネル、Quick shot など のセッションが 続く。米国消化器外科学会のフ レジ デ ントから、外科医の burn out についての発表が あった。40%の外科医が burn out の状態にあり、30%が うつ症状を呈しているとのことで あった。半 数の外科医は、自分の子供には外科医になることを勧めないというのは、待遇が 良好な米国に おいての結果としては意外なもので あった。他にも、政策やシステムに関するセッションが 多く 開催されていた。例えば 高難度な手術を一部の病院に集約化する是非については、集約化による死亡率の減少や患者の移動距離といった様々な視点から発表が なされていた。米国特有の 問題として、アラスカのような極端に人口が 少ない地方の集約化の困難さが 挙げ られていた。

また、直腸癌に対するロボット手術のセッションでは、手技自体の発表ではなく、ラーニングカーブを短くする教育方法、高価な他分野の手術と比較した費用対効果研究、また現在の問題点からの新しい手術ロボットの開発といった、疫学・トランスレーションリサーチの視点に立った発表が多くなされていたことは印象的であった。国際色が豊かな本学会では、International programがいくつか開催されていた。各国の外科レジデンス・フェロー教育を比較するセッションでは、ブラジルやインドにおける手術やその教育の現状を知ることができた。ランチョンセミナーは、Meet-the-professor形式で行われていた。「大腸癌閉塞に対するステント」セッションではエキスパートから経験した実際の症例を提示し、ステントと他治療方法との比較を参加者とともに議論した。ポスターセッションでは、2時間に渡って参加者とのディスカッションが行われる。ポスターツアーに参加すれば、専門家からの説明と同行者による少人数のディスカッションを経験できる。米国で盛んな肥満治療に関するセッションに参加し、最新の研究成果を学ぶことができた。日本国内からも、内視鏡医へのE-Learning Systemのランダム化比較試験、大腸癌閉塞に対するステント治療に関するコホート研究といった多施設共同研究の結果が報告されており、本邦における消化器関連の動向も多く学ぶことができた。また、本学会に参加したことで、cost-effectiveness researchやSEER・ACS-NSQIPといった大規模データベースを利用した疫学研究についても多く学ぶことが出来た。

不勉強ながら、本学会に参加してFinancial Toxicity、System based practiceという言葉が初めて耳にすることが出来た。国内の主要学会では、Public Healthや病院管理を議論するセッションは多くはないと思われるが、少子高齢化が進み、財政面への配慮がより必要となる本邦においても、こうした視点からの発表は今後、より重要性を増していくように思う。今後の自身の研究にも、本学会参加で得た知見を活かしていきたいと思う。

【謝辞】貴重な機会を与えて下さった京都大学教育研究振興財団のご厚意に深く御礼を申し上げます。貴財団の益々のご発展をお祈り申し上げます。